

ことばの宇宙

海外文学レポート

木島始



晶文社

著者について

木島始（きじま・はじめ）

一九二九年京都生まれ。東京大学英文学科卒業。現在法政大学教授。

著書『もぐらのうた』『ふしぎなともだち』（理論社）『私の探照灯』（思潮社）『日本共

和国初代大統領への手紙』（創樹社）『こびと

のこざり』（童心社）『緑の部屋』（福音館書

店）『列島篇想曲』（法政大学出版局）ほか。

訳書『ジャズ・カントリー』『ジャズの本』

『天使のいざこざ』（晶文社）『平凡な恋人の

歌』『ヒューズ自伝・全三巻』（河出書房新社）

ほか。

ことばの宇宙 海外文学レポート

一九七七年一月五日印刷

一九七七年一月一〇日発行

著者木島始

発行者中村勝哉

発行者株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一二一

電話東京二五局四五〇一（代表）・一八四一（編集）

振替東京六一六二七九九

壮光舎印刷・美行製本

ブックデザイン平野甲賀

©1977 Hajime Kijima

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替えいたします

ことばの宇宙

海外文学レポート

木島始



晶文社

ことばの宇宙

海外文学レポート

木島始



晶文社

ことばの宇宙 海外文学レポート 目次

I

ホイトマンの自己発見

11

新世界の水先案内人マーク・トウェイン

24

飛行士のイメージ

フォークナーの作品のこと

42

脱出行をとらえる

エリア・カザンの小説と映画『アメリカ』にふれて

52

死んだアメリカ兵士の歌

60

アメリカ兵たちと十代の戦争

67

II

われわれの未来の基地

SFの批評性

83

嫌われものたち

スパイ小説のこと

101

くちづたえの威力

107

III

a

- リチャード・リープ 『戒厳令下の愛』 N・ゴードイマ 『現代アフリカの文学』 117
 は生きている』 119 『黒人論集』 122 エドガール・モラン 『カリフォルニア日記』 124
 イン、M・ミード 『怒りと良心』 125 エリック・ホッファー 『波止場日記』 127
 『ブルースのかなた』 129 A・ケイジン 『現代アメリカ文学史』 のこと 131
 『カミングズ詩集』 『ルネ・シャール詩集』 134 アラゴン 『断腸詩集』 135
 の伝説』 『獄中書簡』 137 許南麒編訳 『現代朝鮮詩選』 138
 ナジム・ヒクメット 『愛

b

- 『やさしいうた』を編訳して 140
 144 リロイ・ジョーンズ 『ブラック・ミュージック』を共訳して 148
 151 ハーマン・ウォーク 『月に残された遺書』を共訳して 156
 『平凡な恋人の歌』を編訳して 141
 リロイ・ジョーンズ 『根拠地』を共
 ラングストン・ヒューズ短

- 昔話のふしぎ 159 アメリカ警見モザイク 161 クリスクロス 166 風に托された歌の種子 メルセデス・
 ソーサのフォルクローレをきいて 171 死者を偲びながら 175 G・ムスタキ『私の孤独』 178 グルダの覚書
 180 二、三の黒人詩人にふれて 183

IV

一九四〇年代の重要性

モダン・ジャズをめぐっての対話と引用

197

地下の泉 フォークロア

原型と変容と

207

黒人作家の状況把握

235

自伝という文学ジャンル

ラングストン・ヒューズ自伝を三巻に訳して

256

ホイットマンの自己発見

「文壇に於ける平等主義の代表者『ウォルト・ホイットマン』 Walt Whitman の詩について」という日本初紹介の文章をかいたのは、夏目漱石で、ときに明治二十五年（一八九二年）のことであった。当時の日本でこの文章がそれほど読まれたものとは思われないが、とにかく詩人の死んだ年に、日本近代文学の中心人物と云っていい漱石が、ホイットマンの詩を日本に紹介したことは銘記しておいていい。漱石は「manly love of comrades（男らしき同志ノ愛——木島）」といふ斬新なる言を使ひたるは詩人あつてより以来始めてなるべく」と注目しているが、これは国際的にもっとも論議されるようになったことがらであった。炯眼といえるであらう。

ことのついでに先ず日本でのホイットマンを略述すると、一言にしていえば、思想上や作詩上の成果はとにかくとして、『草の葉』の影響は絶大であった。高山樗牛、内村鑑三、岩野泡鳴などのように部分訳したり論じたりした思想家や作家、富田碎花、有島武郎、白鳥省吾のように訳詩集を刊行した文学者があいついで現われ、第二次大戦後になって長沼重隆の全訳『草の葉』が出版されるにいたった。以

上の日本人名をみてもわかるとおり、われわれの近代文学の中心軸のひとつを形成するひとつとよによる紹介であり、訳詩集の種類の多さでは世界一であることが、ホイットマン研究家G・W・アレン教授によって指摘されている。詩や小説に《人生いかに生きるべきか》を求めがちなわれわれの文学観に『草の葉』はまさにびたりの典型であったのだ。いわゆる大正デモクラシー時代にいかに読まれたか、学生時代に古本屋で買ってわたしのもっている白鳥訳の小型詩集は、六年目の大正十四年で三十六版になっている。そしてわたしもまた、小さなあらずもがなの新訳選詩集を河出書房から出版をした。

生存中のホイットマンは、日本でのようにその詩がころよく受けいれられたわけではなかった。孤軍奮闘、なかなかよく頑張ったのである。詩人としてのホイットマンについて特長といえるひとつは、詩集『草の葉』一卷をじつに死の床にいたるまで改訂につぐ改訂を加えて、自己のすべてをそこに凝集したというか、注入したというか、象徴したというか、詩人ホイットマンすなわち『草の葉』という集大成をなしとげたことである。以下に、詩集『草の葉』出版を中心にしての詩人の生涯といくつかの事件について、書こう。

ウォルト・ホイットマンは、一八一九年五月三十一日ニュー・ヨーク州ロング・アイランドのウエスト・ヒルズという小村に生まれた。祖先は海をこえて移住してきたひとびとで、イギリス系の父は農業のかたわら大工をやり、母はオランダ系移民の子孫で、ウォルトは八人の兄弟姉妹の二人目にあたった。代々、母の家は信仰あついクエーカー教徒であった。家族運にめぐまれず、頑丈で勤勉な母とウォルトは、『草の葉』出版の直後に死んだ父なきあと、性病やアルコール中毒や精神病の兄弟や妹を、晩年にいたるまで辛抱強く面倒をみた。

年若いウオルトは、「健脚で」たえず放浪し、ブルックリンに家族とともに移ってから、給仕をしたり、印刷職工をしたりしながら、独学で勉強をした。『アラビアン・ナイト』やスコットの詩を、手あたりしだいに読破し、詩や雑文を投稿した。田舎の学校で教えたり、転々と下宿を変えたりして、十九歳のとき故郷の町でじぶんみずから週刊新聞を創刊、出版した。

初期の詩は、しかし、旧来の韻をふんだありきたりの形式のものにすぎず、かなり数多い小説もとりにたてていうほどのことはない。しかし、いっばしの文筆業者だったから、劇場には「フリー・パスの名簿にのって」おり、好きなオペラや芝居に通ったということである。これらはいずれも『自選日記』にくわしく書いているところであるが、わたしなどが初期の書簡集をみて驚くのは『草の葉』発行以前においても、また以後にも、じぶんの原稿を新聞雑誌に値段を何十ドルとじぶんでつけて送りつけていることである。習慣の違いといえればそれまでかもしれないが、じつにあげすけであり、その後もかれは一貫して『自分自身の為の宣伝』をやり実務を遂行していたことがわかる。

一八四八年に弟ジェフを伴ってニュー・オーリーズに南下した。そこで「クレッセント」紙の編集に従事するためであった。このとき何か女性関係(?)があったのかもしれない。死の二年前に、イギリスのJ・A・サイモンズに宛てて、そのころ放蕩無頼の南部で「結婚はしなかったが……六人の子供をつくった」などと謎めいた手紙を書きおくれたために、ホイットマン愛読者や研究家たちは、宙にふりまわされることになってしまった!

その後の数年が、おそらくホイットマンの生涯でもっとも重要な創造力の噴出する時期であったにちがいないが、ほとんど伝記的事実はわからない。五二年に奴隸制反対論者の上院議員J・P・ヘイルに宛てた手紙が一通最近発見されたが、そのなかには「わたしは民衆を知っています。……猛烈な勢いで

暴君たち……の計算にとびかかってぶちこわす機会を待つ神聖な炎がもえています。現在、ニューヨークはもっとも過激な都市です。もっとも反奴隷制の都市になるでしょう……」といった言葉が見られ、酒場へ出入りして労働者やボヘミアンと親しくつきあっていた頃なので、ウォルトには創造力旺盛でありながら手紙を書く機会がほとんどなかったというのが真相に近いであろう。この頃とくにオペラを好んで聴いたことは、注目しておいていい。

一九五五年、突如として『草の葉』は独力で出版された。約一〇〇〇部。ウォルトは、本屋に置かせるのたいへん苦勞したらしい。本の内容が当時の常識破りなら、外観も風変わりなようである。四つ折判で、濃緑の地に金判で草の葉と根の模様をつけた金文字の表題『Leaves of Grass 草の葉』と表紙にあるが、著者の名前はどこにもなく写真が一枚入れている。発行登録のところに本名のウォルター・ホイットマンとあり、詩のなかで愛称のウォルト・ホイットマンと出てきて、以来かれはウォルトのみを使うようになるのだが、十二篇の詩にはいずれも題名がない。後に改訂され「わたしじしんの歌」となる長詩が冒頭にあった。

わたしは祝福するじぶんじしんを、

そしてわたしが身に引きうけるもの一切を、きみは身に引きうけるべきだ、

わたしに属することくの原子は、同じようにきみに属するのだから。

この初版本には長大な序文が前につけられており、なかなか迫力がある。わたしの注目した箇所を羅列引用しておこう。

「アメリカ合衆国はそれじしんでもっとも偉大な詩である」

「詩人は判事が審判するようにでなく、よるべないもののまわりに落ちる夕陽のように審判する」

「破壊したり作り直したりする力は詩人によって自由に使われるが、けっして攻撃の力は使われない」

「ひとびとは押黙った真実の物体につねに付着する美や尊厳以上のものを示すよう詩人に期待する。ひとびとは詩人に現実とかれらの魂のあいだの通路を示すよう期待するのだ」

「詩人は必要な仕事に時を費すべきではない。土に鋤がいれられ耕されていることを知るべきだ……かれがやらなければ他人にはわからない。直接に創造に向かうべきである」

「知られている宇宙はひとりの完全な愛人をもち、それが最大の詩人なのだ」

「芸術のなかの芸術は単純さである。何よりも単純さに優るものはない」

「正確な科学とその実際の働きはなんら偉大な詩人には障害ではなくて、激励であり支持である。……詩の美しさのなかには、科学の飾り房と最終的な賞讃がある」

「知られている宇宙に、男たちや女たち以上に神聖なものは何もないと認めることは、魂の現実と矛盾するものではない」

「男たちと女たちと地球と地球上のすべては、単純にあるがままにとられるべきで、その過去と現在と未来との調査研究は中絶されるべきでないし、完全な率直さでもって為されるべきである」

「何と率直さは美しいことか！ 完全な率直さをもつひとに対しては、あらゆる欠点が許されるかもしれない」

「精神は、ちょうど肉体に与えるのと同じだけのものを肉体から受けとる」

「ひとつの偉大な詩は、男もしくは女にたいする仕上げではなくて、むしろ始まりなのだ」